

お救い小屋

むかしこのあたりは烏山藩を呼ばれ、山に囲まれ、那珂川が流れる閑かな所だった。「今年こそ豊作じゃ」と豊かな実りを願いながら、村人たちは毎日仕事に励んでいた。

天保七年（一八三六年）、春先から低温の日が続き、

七月中頃、夜半から降り続いた雨風は、

那珂川を増水させ田畑を容赦なく流出させた。

さらに、九月に入り大霜が降り、

この年の米の取り入れ高は、例年の三分の一にも満たず。

「なんてこった。今までの苦労も水の泡だ」

村人たちは、途方にくれた。

藩は前年からの米の値上がりと大きな借金で、

村人たちを救うことができなかった。



その頃、桜町（現在の真岡市）では

「二宮尊徳」により田畑の開墾と財政政策が行われ、

その成果が表れていた。

「このままでは、死者をだすことになる」

天性寺の円応和尚と、家老の菅谷八郎衛門は、桜町へ。

「ど、どうか・・・どうかお助けください」

藩の救済を願っていたが、引き受けてもらえなかった。二人は桜町陳家前で昼夜にわた

り座り込みお頼みして、ようやく「報徳仕法」の支援を得られることになった。

さっそく、天性寺参道の両側に十二棟のお救い小屋を建て、お粥の炊き出しを始めた。

「うめえな、ああうめえ」

「なんてありがてえこった」

一日約七百五十人、それは百五十日間続いてな。

この炊き出しのおかげで、一人も亡くなった人はいなかったと。

おしまい